

# — 116 —

## 出米事

堀 田 庄 二

大平さんと初めて出会ったのは二つのことかあまりせりあつしな」。しかし、私が親しかった池田さんの藏相時代に、その秘書官として政界に足を踏み入れられたので、おやじくやの頃から顔を合わせていたものと思ひ。その後、「一つの出来事をきっかけに、私は公私両面で大平さんと因縁浅からぬ仲となつた。

最初のきっかけは、昭和三十八年のことである。当時、政府は E.F.T.A.（歐州自由貿易連合）諸国との経済交流を進めるために初の公式使節団の派遣を検討していた。その時、私は使節団の団長就任を要請されたのが、第二次池田内閣の外相をしていた大平さんであった。これは池田首相の差しカネであつて外務省に赴くと、大平さんは、私が昭和三十一年に外務省顧問・移動大使として歐州十三力国を歴訪した際の報告書を読み、そのうえで決められた様子で、「前回の立派な報告は拝見しました。今回も人選はすべておまかせするので、是非お願いしたい」といわれた。六年も前の報告書に目を通された大平さんの勉強ぶりに驚き、私も一つ返事で引き受けたこととなつた。その時の使節団のメンバーは、正田英三郎（副団長）、有吉義弥、谷口豊三郎、武田長兵衛、今里廣記、小坂徳三郎、石橋幹一郎氏等の鉢々たる顔ぶれで、今まで時々集まり、血氣をかんだつた昔にものつて談論風発し命の仲である。

第一のきっかけは、昭和五十一年に上原正吉さんのお孫さんが大平家に嫁がれたことである。上原さんは、1)血縁も政治に関わっておられたが、それだけに政治家と姻戚になるのはどうかと少し躊躇され、私に相

談を持ちかけられた。私はすでに大平さんの裏表の全くない誠実さと温厚な人柄を十分承知していたので、大平氏の案に賛成だと即答した。上原家とは、すでに私の一男と上原さんの上の孫娘との結婚を通じて縁戚であったので、大平家とも間接的ながら姻戚になつたわけである。以来、個人的にも大平さんと昵懇になつた。

大平さんの政治家としての手腕や功績はいまさら語るまでもない。戦後のわが国の幾多の重大転機において、大平さんが果たされた役割を数えあげれば際限がなく、永く歴史に残る足跡を印された。

私は、池田首相とは同年の集まりとして、小林中、水野成夫、小池厚之助、東畠精一氏等とともに、「亥の一黒会」と称する会合を月に一度持つていた。池田さんはその会合が一種の無礼講なのでよほど気に入つたとみて欠かさず出席し、時には秘書官が再三呼び出しても席をたたず深夜まで歓談することがあった。そんな機会には、池田さんはよく本音を語られたものであるが、吉田、池田と流れる戦後の保守政治の継承者として、「将来、前尾君や大平君に大いに期待している」と、折にふれて話されていたのを思い出す。大平さんは、遂に総理とはなられたが、志半ばにして逝かれたのはかえすがえすも残念であった。

大平さんは、クリスチヤンであったためであろうか、非常に誠実でウソのいえない人であった。そのような政治家としては過度ともいえるほどの真面目さが、常々自らに重圧を課し、結局、それが晩年の過労につながつて寿命を縮めたのではないかと思うと残念でならない。また、暖かく思いやりのある心の持主でもあった。私事にわたるが、先年、亡妻の葬儀の際にも、自民党幹事長という多忙の身でありながら出棺するまで庭に立ち続けておられたことなど、氏の真面目な暖かい友情を永遠に忘れることはできない。

その大平さんも今は不帰の客となり、淋しさに耐えない。しかし、逝かれて後、保守政治は再び安定勢力の基盤を取り戻した。これも大平さんの積善の余慶といえよつか。

（住友銀行名誉会長）